

温泉観光地の再生に関する実証的研究

-『阿寒湖温泉再生プラン 2010』の概要と策定経過について-

「住民参加」と「情報公開」をキーワードに2000年度から2年半にわたり阿寒湖温泉が目標とすべき温泉地像、取り組むべき方策、グランドデザイン等を検討し、わが国を代表する湖畔観光地への発展に向け、2010年を目標とした再生プランを策定した。計画策定のプロセスは検討委員会での議論を踏まえ、住民によるワークショップ等によりとりまとめたが、その内容を「ニュースレター」で住民に情報公開を行ってきたこと、「阿寒湖温泉まちづくり協議会」を創設し、できることから順次着手する体制づくりを行ったこと等に特徴がある。

(阿寒観光協会との2カ年の共同研究)

●梅川智也 朝倉はるみ 岩城智子

目次

本編 「阿寒湖温泉再生プラン 2010」 公開・2,000円（阿寒観光協会にて実費発行）
- 阿寒湖温泉活性化基本計画 -

第1章 阿寒湖温泉の現状と課題

1. 阿寒湖温泉を取り巻く現況
2. 地域特性
3. 空間課題

第2章 阿寒湖温泉再生プラン（全体計画）

1. 魅力ある阿寒湖温泉への展開方向
2. 阿寒湖温泉再生に向けたコンセプト（基本構想）
3. 阿寒湖温泉再生に向けたアクションプラン（基本計画）
 - (1) 環境整備の基本的考え方
 - (2) 地区別展開方向
 - (3) 全体計画

第3章 2000～2001年度に着手した8プロジェクト

第4章 2002年度以降着手すべきプロジェクト

1. 早急に着手すべき9つの最重点プロジェクト
2. 39の重点プロジェクト

第5章 事業費の概算

第6章 今後の進め方

阿寒湖温泉活性化検討委員会

●座長

花岡 利幸 山梨大学環境整備工学科 教授

●委員

有山 忠男	株ライヴ環境計画 代表取締役社長
石井 浩三	株コンサルティングセンター 代表取締役社長
菊地 邦雄	法政大学人間環境学部 教授
小磯 修二	釧路公立大学地域経済研究センター長・教授
野口 智子	ゆとり研究所 余暇コーディネーター
原 重一	(財)日本交流公社 常務理事
船曳 寛真	日本エアシステム株 代表取締役社長

1. 阿寒湖温泉の現状と課題

(1) 阿寒湖温泉を取り巻く現況

阿寒湖温泉は釧路空港より国道240号線を北へ55km（自家用車で約1時間）の距離に位置する。阿寒湖南側の湖畔に帯状に広がる約80haの温泉街である。豊かな自然資源に恵まれ、阿寒湖は、(財)日本交通公社による資源評価では、「全国的な誘致力を持つ」資源（A級）として評価されている。阿寒湖に生息するマリモは「地方スケールの誘致力を持つ」資源（B級・同評価）であり、また国の特別天然記念物にも指定されている。人文資源ではアイヌ古式舞踊が国の重要無形民俗文化財に指定されている。

阿寒湖周辺一帯は(財)前田一步園財団が土地を所有し、森林や温泉源の保全管理を行っている。また、阿寒国立公園としての厳しい規制で開発が制限されているという特殊な環境のために、優れた自然環境が維持されている。



図1 阿寒湖温泉の位置



図2 阿寒湖

(2) 地域特性

観光地としての阿寒湖温泉は、道東エリアトップの宿泊収容量（7,000人）を誇る宿泊拠点である。その大半は大規模旅館が占めている。宿泊客数は1998年度

の103万人をピークに2000年度には91万人と減少した。宿泊客の9割が1泊、しかも2／3が4時以降に到着し翌朝9時までに出発してしまうという実態にある（阿寒湖温泉宿泊客アンケート調査より）。また木彫の土産店中心の商店街が3カ所も成り立っていることは、道内はもちろん全国的に珍しい。しかし、飲食店を含め観光客のニーズに対応できずにいるのが現状である。

住民（約1,800人）にとって、医療施設の未整備、文化施設の不備、交通や買い物の不便さ等から、永住希望は1／4足らずである（阿寒湖温泉地区住民アンケート調査より）。また、前述した特殊な土地条件は、逆に住民にとっては制約が多く、定住しにくい要因の一つとなっている。

(3) 空間課題

湖岸に大型の旅館が屏風のように並び、肝心の湖がメインストリートから見えない。観光関連施設と居住関連施設が混在し、雑然としている。湯けむり等温泉情緒を街なかに感じられる所が全くないため、温泉地であることを実感できない。

賑わいの核は、エコミュージアムセンターとまりもの里商店街を中心とする湖畔東部と、アイヌコタンと幸運の森商店街を中心とする西部に大別されるが、中間に起伏があるために観光客が行き来しづらくなっている。

大規模な駐車場（有料）が国道沿いに整備されているが、団体客も個人客も道幅の狭い温泉街に車を乗り入れる。しかも住民による路上駐車も多い。メインストリートの歩道は狭く凹凸があり、かつ案内表示も整っていない。観光客にとって歩きづらい温泉街となっている。

2. 阿寒湖温泉活性化戦略会議の取り組み

(1) 設立の背景

1. 述べたような地元の危機感とこれまでの観光振興の取り組み方の反省から、阿寒湖温泉の住民が主体となって阿寒湖温泉のまちづくりを行ない、かつ自分たちでできることから始めるということから、色々な立場の人と一緒に阿寒湖温泉の将来を考える場として、2000年度に「阿寒湖温泉活性化戦力会議」が立ち上げられた。具体的な計画（再生プラン）については、町外委員と町内委員からなる阿寒湖温泉活性化検討委員会を設け、そこでの議論を元に2カ年かけて策定することとなった。

(2) 2000年度の取り組み

- ・活性化検討委員会を3回開催した。
- ・4部会（ショッピングの楽しみ、食の楽しみ、泊まる楽しみ、まちづくり）を設け、できることから実現

するための具体的な取り組みを始めた。

・阿寒湖温泉の観光関連施設（宿泊施設、土産品店、飲食店）の実態把握のためにアンケート調査を実施した。

・住民の意識改革のために、2回のワークショップを開催した。

第1回：まちなか歩き—阿寒湖井試食会等

第2回：『阿寒湖みんなで“おもてなし”』講師：渡壁 ほづみ氏

・住民の積極的な参加を図るために、戦略会議での議論や活動を「ニュースレター」で随時情報公表を行った（2001年度末までに8号を発行）。

・これらを年度末に、活性化基本計画中間報告書—現状分析編としてまとめた。

（3）2001年度の取り組み

・「阿寒湖温泉まちづくり協議会」の設立。

→2. (4)

・国立公園内観光地のあり方等を学ぶために先進地力ナダのパンフ、ジャスパー等を訪れた。地元住民13名参加。



図3 「花いっぱい運動」の様子

- ・宿泊客の実態把握のためのアンケート調査及び住民意識調査（アンケート）を行った。
- ・住民に再生プラン推進の理解と協力を求めるために素案の住民説明会を数回開催した。
- ・阿寒町の女性が自主的なまちづくりの活動を行うことを目的に「まりも俱楽部」が設立された。
- ・住民が主体となって、実験ガーデン整備等の花いっぱい運動を行った（図3）。
- ・以上の活動を元に、年度末に「阿寒湖温泉再生プラン2010（活性化基本計画）」を策定した。

（4）まちづくり協議会の設立

阿寒湖温泉では既存組織が多数あり、それぞれが独自にまちづくり活動を推進している。2001年度に再生プランが提案されるに当たり、「阿寒湖温泉のまちづくり」という共通認識・共通目標のもとに、各組織がプロジェクトを推進していくかなければならなくなつた。そのため、既存組織で推進されているプロジェクトと再生プランで提案されたプロジェクトの調整（重複分野の軽減、弱点分野の強化等）や、目標に向けた実行プロジェクトの選定と実施管理を行うための連絡調整機関が必要となり、「阿寒湖温泉まちづくり協議会」が2001年6月設立された。

3. 「阿寒湖温泉再生プラン2010」の策定

（1）基本コンセプトの設定

阿寒湖温泉活性化のために、観光地としては、個人客に対応できること、ゆっくり時間を過ごす「滞在地」への変革が、また生活の場としては、住民が阿寒湖温泉の魅力を理解し、美しい街にしようと自覚し、自ら“暮らしやすいまち”をめざして活動していくという意識改革が必要である。

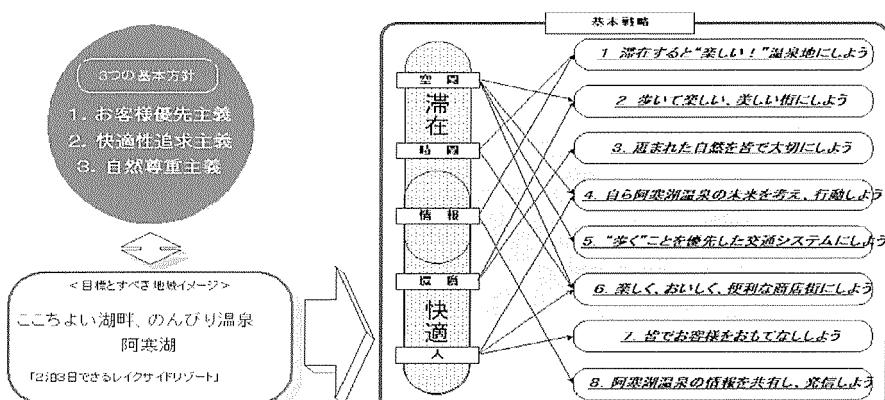


図4 阿寒湖温泉の再生に向けた基本方針

そこで、2010年に目標とすべき地域イメージを『こちよい湖畔、のんびり温泉 阿寒湖～「2泊3日でできるレイクサイドリゾート」～』とし、様々な「構造改革」を実行していくこととした。

2010年の具体的な目標数値は、
 <宿泊客>概ね100万人泊／年（実人員は85万人程度）、1泊客8割、連泊客2割（現状9%）、道外6割、道内4割（現状22%）
 <日帰り客>90万人／年（現状維持、但し阿寒湖畔での滞在時間を延ばす）
 とする。
 基本方針は、以下の3つである。

①お客様優先主義

個々のお客様の求めるものに的確・迅速に対応し、満足していただけるようにする。

②快適性追求主義

湖岸地区を宿泊客以外にも積極的に開放したり、商店街のファサード統一や花の植栽等により美しく居心地のいい快適空間を作る。

③自然尊重主義

住民、観光客も含めこの地に係わる全ての人が自然保全につとめ、後世に継承していく。

この3つの基本方針を前提に目標実現のために、8つの基本戦略を立てた（図4）。

（2）全体計画

1) 10年後のグランドデザイン

空間整備の目標は、「国道から湖岸側は来訪者にとって快適な空間としていく」とこととし、“快適な時間”を過ごせる空間を提供するためには、温泉街外への移転可能施設の移転も念頭に置きながら、以下の

基本方針に沿ってグランドデザインを設定した（図5）。

①湖へのアクセスを改善し、湖と触れあえる空間を増やす

②歩きやすい、わかりやすい空間づくりを進める

③散策の目的、活動施設を増やす

グランドデザインのポイントは3点あるが、最も重要な点は、湖岸全体を誰でも自由に湖に親しめる空間とするために、観光客や住民が阿寒湖を眺めながらのんびりと過ごせる、一体的な湖岸公園として整備することである。

2点目は、湖の東側集客拠点と西側の集客拠点との間に人を呼び、人の流れを生み出すための仕掛けづくりを行うことである。具体的には中間地点に、阿寒湖温泉の核となる湖畔中央公園（仮）と住民の公共サービス施設を兼ねた観光・タウン情報センター（仮）を整備することとする。

3点目は、歩行者優先のまちにするために、温泉街への車両の進入を限って一方所に定め、かつメインストリートである中央通を一方通行にすることと、温泉街を起点とした散策路を整備することである。

2) 2010年までに推進すべきプロジェクト

8つの基本戦略に基づき、この再生プランでは、全部で56のプロジェクトを提案した（図6）。この中には、花いっぱい運動やまりも俱楽部をはじめ2000、2001年度から開始している8つのプロジェクト（図7）と、特に早急かつ必ず推進すべきプロジェクト9つ（詳細は4.）が含まれている。

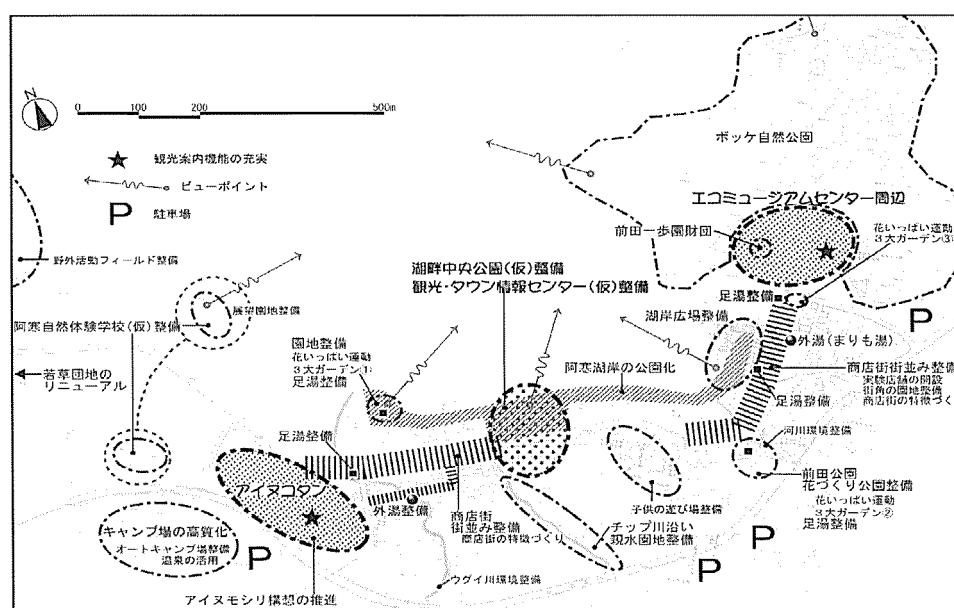


図5 2010年に向けたグランドデザイン

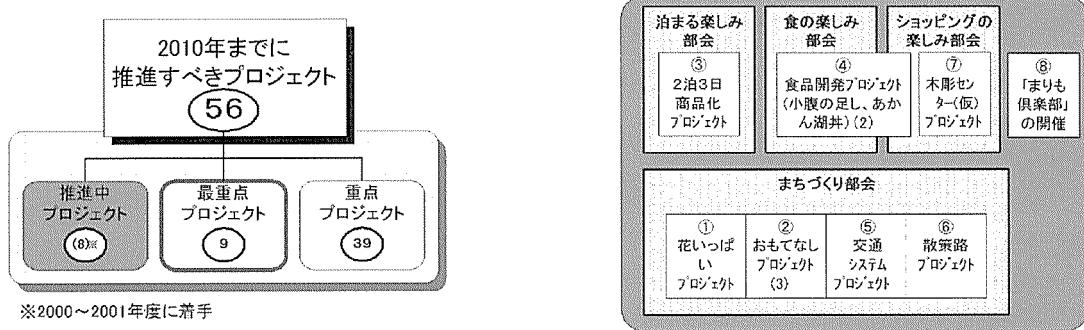


図6 全プロジェクトの関係

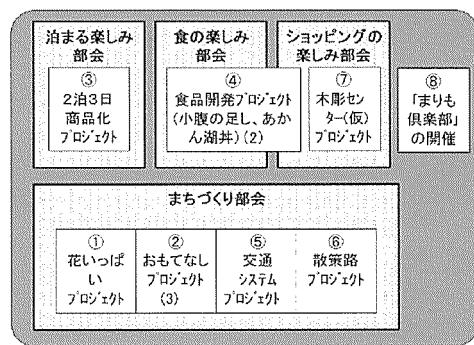


図7 推進中プロジェクト

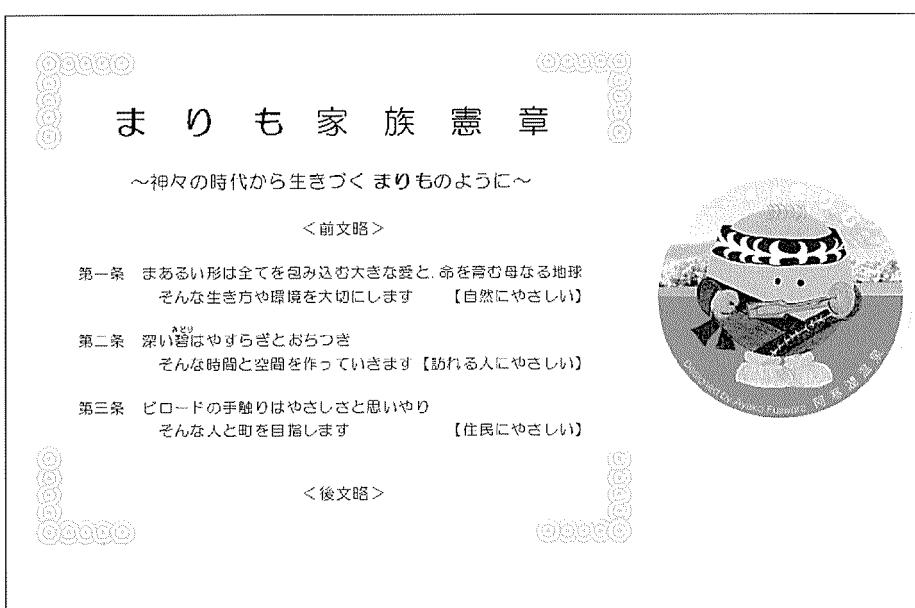


図8 おもてなしプロジェクト ～まりも家族憲章とまりむ（まりもキャラクター）～

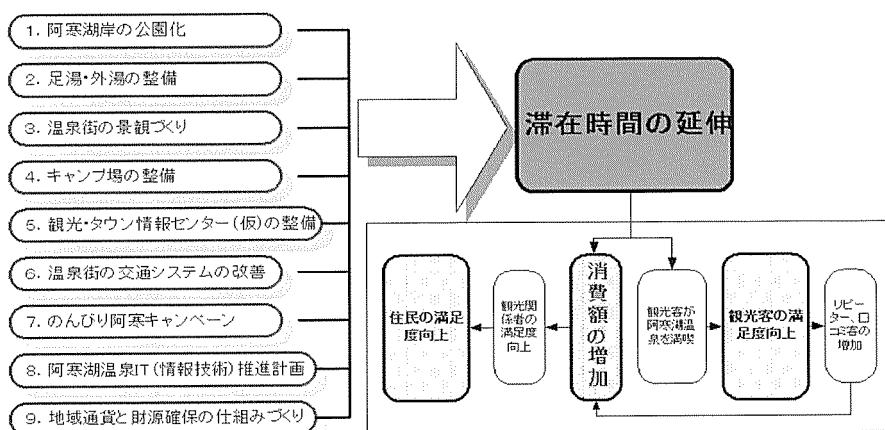


図9 最重点プロジェクトの考え方

4. 最重点プロジェクトの選定

先に示した56のプロジェクトは、事業規模や推進期間がそれぞれ異なる上に、その重要度も様々である。その中から今すぐ着手しなければならない、阿寒湖温泉再生に不可欠なプロジェクトを9つ選定した(図9)。

これらは、事業規模が大きく、実現までに数年間、あるいは10年以上要すると思われるものと、まず先にこれを実現させなければ他のプロジェクトが進みづらいというものがある。

従って、阿寒湖温泉再生のためには、これら9つの最重点プロジェクトをできるだけ早く着手し、実現を目指すことが急務である。

5. 今後の課題と展望

(1) 今後の進め方

本再生プランは、観光関係者だけでなく、住民の意向を踏まえながら活性化検討委員会において検討を重ねて策定したものであるが、まだこの段階では、いわゆる「地元の意向」がとりまとめられたに過ぎない。今後はこの再生プランで検討、提案したことが町や道、国の公的な計画として位置づけられる必要がある。その意味で、まずは阿寒町総合計画の中に位置づけられること、さらに環境省の公園計画との整合を図

ることが重要である。

また、この再生プランが本格的にスタートする2002年度からは、それぞれの組織の役割分担を明確にすることと、計画通りにプロジェクトが進むための「計画監理」が重要となる。

(2)(財)日本交通公社の計画監理

再生プランが「絵に描いた餅」に終わらせないため、またその意図通りに推進されているかどうかを客観的に判断し、助言するため「計画監理」の必要性は高い。

2002年度プラン推進のために、以下の支援を行った。

- ①プロジェクト推進のための各種勉強会の開催。
- ②旅館から宿泊客を温泉街に出させるため「まりも家族手形」の社会実験(国土交通省事業)。
- ③「阿寒湖温泉花づくりガイド」の作成と配布。
- ④商店街経営者実態調査、並びに既存イベント現況調査の実施。
- ⑤協議会の法人化(NPO)についての検討と支援。
- ⑥「まちづくり交流フォーラム」の阿寒湖温泉開催。

(3) 今後の展望

今後、市町村合併の問題を控え、まちづくりの自主的な財源の確保が大きな課題になっているが、国、道等の協力を仰ぎながら地域が一体となって各種プロジェクトを推進していくことが期待される。



図10 阿寒湖岸の公園化
—湖畔中央公園(仮)のイメージ—